

首里城と琉球・沖縄文化

首里城と染織文化

第14回 2021.1.27
附属研究所 新田摂子

1 紅型と王府の行政機構

1-1 誰が身に付けたのか

- ・王族・士族の女性向けの特注品（*小柄なもの、藍型 → 庶民の晴れ着）
一般の人々の普段着は芭蕉布（*士族・王族も芭蕉布を着る）

◎紅型：貴重な素材や専門的な技術

- ・踊り衣裳 冊封使の歓待

◎王族・士族の女性、芸能関係の少年

1-2 誰がつくっていたのか

- ・紺屋：くんやー（首里を中心に沢岬家、知念家、城間家）
- ・鎌倉芳太郎（沢岬家：紅型の見本帖、知念家：型紙入手）
- ・首里 20 人、泊 20 人、那覇 13 人：計 53 人（*泊、那覇での生産については不明）

◎紅型：限られた人々のために、限られた紺屋によってつくられていた

1-3 王府との関係

■素材

- ・納殿：紺屋を管理、素材を紺屋に提供（石黄、醒臙脂、胡粉など）
→全部中国からの輸入品
- ・沖縄在来染料：琉球藍、鬱金等特産品
- ◎紅型：かなり特殊で、特権的な衣裳
- ・型紙用の紙（日本から輸入）、生地（木綿・苧麻：貢納布、絹：輸入品）
→用物座から支給
- ◎色材以外の紙、布も王府からの支給

■デザイン

- ・王家の御用の紅型は貝摺奉行所の絵師が描く
- ・紅型衣裳の図案の写真が残っている
（石嶺伝莫の家譜：王女の結婚の際に衣裳の下絵）
- ◎王家衣裳：専門のデザイナー

まとめ

紅型は、王族・士族の女性、踊り手・楽童子の少年のため、
納殿所属の紺屋と貝摺奉行所の絵師により、
中国から輸入された貴重な顔料等を使用してつくられていた
◎王府の管理のもと、複数の部署が関わることによって生産

2 貢納布と御絵図

1. 貢納布とは何か

1 貢納布の素材

芭蕉：全ての階級、木綿・紬・苧麻：貢納布

2 貢納布を身に付けたのは誰か

木綿・紬：王族・士族の為の冬物

苧麻：王族・士族の為の夏物

◎一般の人々は身に付けることは出来ない

3 貢納布を生産していたのは誰か

宮古、八重山、久米島の女性達

4 貢納布生産の目的

薩摩への貢納を負担させるため

宮古、八重山、久米島に反物を納めさせた

- ・薩摩向け
- ・特注品の首里の王族・士族向けの御用布

5 王府との関係

役人が派遣：女性達は苧績屋などに集められる

◎貢納布の生産は厳しく管理（長さや提出期限など）

2. 御絵図とは何か

2-1 御絵図とは

特注品の御用布のデザイン

2-2 御絵図は誰が描いたか

貝摺奉行所の絵師

2-3 王府との関係性

御絵図＝琉球独特の美しさ美意識が凝縮（色彩、緋の大胆さ）

黄色地：最上位の色、王家の象徴＝王族にのみ許された色

◎琉球独特の色彩感覚

緋：玉数少ない＝王家用

* 厳しい管理が逆に難しい柄へ展開

◎琉球独特の美意識

参考文献

『沖縄復帰 40 周年記念 紅型 琉球王朝のいろとかたち』サントリー美術館、2012 年

『御絵図 ～琉球の織物デザイン』那覇市歴史博物館 展示会図録

宮城篤正『すぐわかる沖縄の美術』東京美術、2007 年